(..)φ メモメモ

あの赤茶けた楕円形が視界の端に見えたときに、私がもよおすであろう感情。
散漫だった意識が数センチ規模の領域に収束していくのがわかる。
わずかの時間で、世界は完新世っぽいホモ・サピエンスとカンブリア紀っぽい
コックローチの二者択一の空間に変貌を遂げる。

この空間の変貌には大きな問題がある。
問題はおそらく、変貌がホモサピによって一方的にもたらされたことによるものだ。
ホモサピは往々にして世界の解釈方法(多くは言語的な解釈)に絶対の
自信をもっていることに無関心である。であるわけなので、自らの解釈を
種を越境して敷衍することにもためらいはあまりないようだ。

昨今のホモサピ界隈では、犬や猫を始めとした他の多くの動物に対して、
字幕を当ててみる所作が流行っている。
これはホモサピの言語による一方的な敷衍の例だ。
ホモサピ以外の動物の動作を、ホモサピの言語的な振る舞いに還元させること。
感情も関係も規範も、すべてはホモサピがしつらえた意味の束の中で再演される。
だが常に、「役者」にだって感情も関係も規範も存在するのだ。
多くの場合、解釈による想像力を上回るであろう場所に。

興味深いことにホモサピは、ホモサピが共感を覚えにくい動物に
字幕を当てることを、これまた一方的に放棄する。
犬や猫にでこでこしたフォントをつけても、昆虫にはそうしないという具合に。
言語を恵んでやる対象は、どれだけホモサピ様のコミュニケーションスタイルに
近いかによって決定される。
高所から低所へ、私とお前、ホモサピとそれ以外。
一方通行であることだけが貫徹している。

強力な政治的力学が発生している。
視界の端に影を捉えた瞬間に、ホモサピはある特定の反応をするように
政治文化的・社会心理的な訓練を受けている。
少なくないホモサピがこの訓練に背を向けるわけだが、なんとなく受容して
しまうホモサピの数もまた夥しい。

私もまた例にもれず、ホモサピとコックローチによる二者択一の
世界観を再上演してしまうのである。

強力な政治的力学が発生している。
例えば、幼い時から嫌韓のニュースをシャワーのように浴びて育った 20 代のように。
例えば、幼い時から天皇崇敬の常識をシャワーのように浴びて育った 20 代のように。
政治は「なぜ」が発生する手前の生理的な感情に食い込んでくる。
「どうしようもなく〇〇が受け付けられない」というわけであり、そこに理由は
もはや必要ないのだ。
政治とは、ある場面では、理由の不必要を正当化する作用のことである。

こうしたわけであるので、私は自らのリバイバルについて、
恐れを感じずにはいられない。
私の意識は二つの方向に引き裂かれるようにして引き延ばされていく。
一方の先端は、リバイバルを成り立たせてしまっている自らの観念の政治性に
対する無関心に向かって。
他方の先端は、ホモサピの想像を常に上回る場所で展開されている動物たちの
やり取りの繁茂について。

後者は常に想像を上回る場所で行われているので、今の私は可能性を遊ばせる
ことしかできない。
だから前者の一方的な営みについて、想像力を膨らませてみるわけである。
もし、コックローチと二存在きりになったときに、政治的力学の反復を意識的に
断ち切ることができたとしたら？
一方的な空間の変貌を阻止し続ける政治性を備えることができたとするならば。
感情と関係と規範は、どのように変貌するのだろうか。

（終）